

土ねり三人

平方久直・作
北島新平・絵



土ねり三叔ん

平方久直・作／北島新平・絵



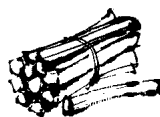
ポプラ社の創作文庫 11

土ねり三ねん

平方久直

ポプラ社 昭和49年 122p 22cm

N.D.C. 913



検印省略

土ねり三ねん

著者 平 方 久 直

昭和49年3月20日 印刷©

昭和49年3月30日 発行

発行者 久 保 田 忠 夫

発行所 株式会社 ポ プ ラ 社

〒160 東京都新宿区須賀町5
振替東京149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 富士製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます

8093—005011—7764

まえがき

ザーツと

にわか雨がきて、

みちばたにできた 水たまりで、

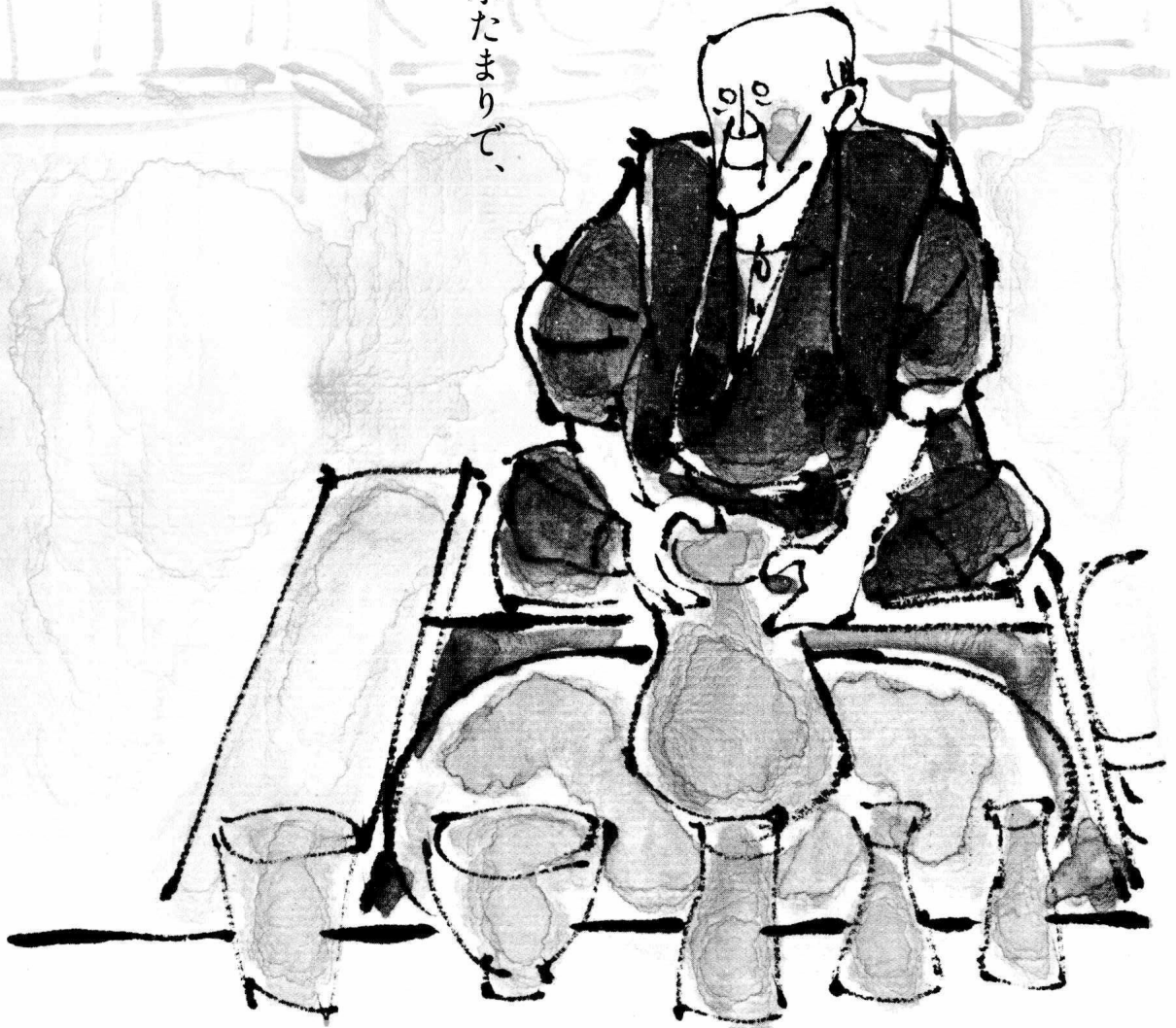
手も 足も しりも

どろだらけにして、

思いつきり こねた

どろんこの あじ、

たまらんなあ。





もくじ

モロの中／6

雲がくれ／20

観音様／30

チヨーメンチヨロリン／41

キクもみ／54

窯たき／65

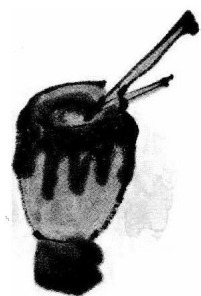
こわれる／81

ミミズのうた／95

ろくろはまわる／109

あとがき／122





著者の紹介

平方久直（ひらかた ひさなお）

一九〇四年岐阜県に生まれる。

旅順師範学堂研究科卒業。現在、日本児童文芸家協会会員。

主な著書に「王の家」「北京へ行く」「まんしゅうのおじさんから」などがある。「ふるさとのななし」をはじめめとするふるさともので、第一回博報堂賞をうける。

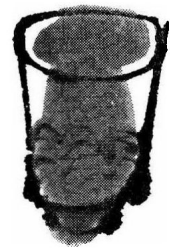
北島新平（きたじま しんぺい）

一九二六年、福島県に生まれる。一九四四年長野県に移り、教師生活を続けながら画業に励む。一九七一年上京して画業に専念、現在、児童出版美術家連盟会員。「きょうまんさまの夜」「ひとりばつちの政」「てんりゅう」など、多数の絵本、挿絵の作品がある。

土ねり三ねん



モロの中



タメサの家は、やきものづくりでした。

タメサの家ばかりではありません。このあたりは、どこも、皿や湯呑み、つばなどやいて、くらししていました。

村下を流れる川は、いつも、ぼおっと、白くにごっていました。

美濃（岐阜県）の東の、尾張（愛知県）に近い山里でしたが、はじめてこの川を見たものは、

（なんだってこんなにも、にごっているのだろう。このごろ、そんな大雨もふらないのに。）

と、へんに思います。

水は、かんかんでりの空の下を、にごったまま、ゆっくり流れていました。

土こしをした水が流れこんで、川の色までそめているのです。土をこね、土をやいてくらす村らしいながめでした。

中学といつても、いまの義務制の中学ではない、五十三人のクラスメートのなかから、わずかに三人しか受験生がない旧制の中学である。クラスの六パーセントにみたない受験者数だった。

三郎のクラスでは、町の郡役所の土木課長を父にもつ英助と、村に一けんだけの、水車をもっている米屋の子の竹子と、三郎の三人だけが受験生。いわばエリートである。

竹子は女学校を受験する。これは女だけにかぎられた学校である。

もうひとり、去年の春、中学の受験にしまった村長の次男の悟が受験する。

悟は三郎より一つ年上で、からだも大きく力もある。三郎のすかない少年だった。

（おれは、中学をでたら東京へいこう。小説家になるんだ！）

三郎は、もう、こうきめてかかっていた。

作文がクラス一である自信と、東京の少年雑誌に詩を投稿して、賞品に銀メダルをおくられたよろこびが、いつも三郎のゆめを山のかなたの東京へさそうのだった。

三郎は、ふと、雑誌に投稿して入賞した詩をおもいうかべて口ずさんでみた。だれに気がねもない、だれも見えていない村のでこぼこ道だった。

明るいといつても

黄色な明るさだから

秋の林は さびしいんだ

だ二つか三つのころ、モロ（仕事場）で土なぶりをしているそばを、ゼイゼイと、のどを鳴らして、歩いていました。腰をエビのようにまげ、せんそく持ちでもあったでしょう、いつも、ゼイゼイ、いつていました。

何をしていたのか、知りません。仕事をしていたのか、ただ、何となく、そこらをうろついていたのか。ゼイゼイという、ひしゃげたような音だけは、きみょうにタメサの耳に今でも残っています。

そのうちに、ゼイゼイも、いつのまにか聞こえなくなり、エビのようなすがたも消えてしまったのですが……。

おとむらいの日のことなど、まったく、タメサはおぼえがありません。

おじいさんは、まだまだ元気で、ろくろの前に、木のかぶのようにすわって、働いています。そのそばで、おとうさんも、せつせと、ろくろをまわしています。

おかあさんとヒコ兄は、土や、まきのせわをしています。

こんなふうに、家じゅうで働いているのです。いつのころやらわからないくらい遠いむかしから……。

そんな家に生まれたせいもあって、タメサは土いじりが好きでした。やわらか

いものを思うままにいじくったり、ひねくったりしていると、あきることがありません。

よちよち歩きのじぶんから、もう、モロへはいりこんで、遊あそんでいました。ひとにぎりほどの土をもらって、それをこねたり、のばしたりして、喜よろこんでいました。

モロは、昼間ひるまでもうす暗ぐらい。

だだっ広い土間どまのまわりには、つりだながあつて、一つ一つの段だんに、ろくろでひきあげた皿さらや湯呑ゆのみが、三尺板さんじやくいたにのせられて、ひっそりとおかれていました。

南側みなみがわの、ろくろのある方だけ、障子しょうじをはめこんだ明りあかとりがあります。それも、寒いときには土がこおらないために、土間でもみがらをたくので、黄色にすけていました。

何一つ、ぱっとしません。

どこかで、ネズミでものぞいていそうなところでした。それでも、タメサはへいきで、日暮ひぐれになって、みんな母屋おもやへひきあげていっても、土をいじくっていません。

「タメ坊ぼうは、よいやきもの師しになる。」

と、おじいさんはいいました。

「かわったやっちゃ。」

と、おとうさんはいいました。

やわらかい土の手ざわりが、よほど、タメサの性しやうにあっていたのでしょう。

こんなことは、あんまり品のよい話ではありませんが……。

タメサが、まだ、やつと障子しょうじのさんにつかまって、たっちできるくらいときでした。

その日は、窯かまづめで家じゅう、大いそがしでした。

タメサは、腰こしにつなをつけられて、母屋おもやの柱はしらにつながれていました。窯かまづめや窯出かまだしときは、きまって、そうされるのです。

いつもだったら、ひどくむずかるのに、母屋からはもの音一つ、聞こえてきません。

へんだな、と思って、おかあさんが、仕事しごとのあいまに、そつと障子をあけてみて、

「ババッチーイッ。」

と、さげんでしまいました。タメサは、じぶんのしたうんこを、てのひらでまる



めて、遊^{あそ}んでいたのです。

「食^たべた」というのでしたら、このころにはよくあることです。

小さいときにそんなことをしたものは、おとなになっても尺^{しゃく}八^{はち}が吹^ふけない、などという、いいつたえもあるくらいです。

手でまるめて遊んでいたなどというのは、あまり聞いたことがありません。

学校^{がっこう}へ通^{かよ}うころになって、おかあさんがこの話^わをすると、両^{りやう}方^{ほう}のてのひらをじつとながめていたタメサは、

「おれ、そういわれれば、思い出すなア。」

といいました。

「どあほ。だれがあんな小さいときのことなどおぼえているもんか。」

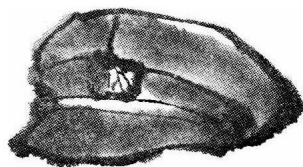
「それでもおれ、てのひらがほわつとあたたこうなつたでえ。」

タメサは、まじめな顔^{かお}をしていいいました。

タメサは、学校へいくとしになると、

「おれ、学校なんか、いやじゃ。」

といいました。



ふつうでしたら、よそのおじさんにまで、

「おれ、こんど学校のぼるんじゃぞ。」

などと、いぼってみせたりするものです。

「となりの坊^ぼん、たは、親類^{しんるい}まわりをして、祝儀^{しゅうぎ}かせぎをしとるそうな。あんなのが、子どもらしくてかわいいよ。」

と、おかあさんはいいました。

「あいつは、モロの中のネズミじゃで。人なかへ出るのがこわいんじやろ。」

そのうち、だんだんなれてくる。」

おとうさんは、氣^きにもしませんでした。が、ヒコ兄^{あに}は、

「何^{なん}でおんし、学校いくのがいやなんじや。バカったれが。」
と、しかりつけました。

タメサは、すまして、

「学校はさわがしいからなア。」

と、こたえました。

「さわがしいから？　なるほど、タメ坊^ぼらしいわい。はっはっは。」

おじいさんは、入れ歯^{いば}をおとしそうにしてわらいました。

「おんし、学校とお寺とまちがえとるのと、ちがうか。」

ヒコ兄はあきれましたが、

「学校いかんと、おまわりにひっぱられていくぞ。」

といいました。

それほどおどすつもりでもなかったのですが、タメサにはひどくこれがこたえたようでした。

今まで小にくらしいほどおちついていたのが、

「ほんと？　ほんとにおまわりくる？　な、な。」

と、ヒコ兄の手にすがりつかんばかりに、いいました。

「ほんとさ。上の区かみのシゲコのところへもきたし、それから……キノもひっぱられたし。なあ、おっとう。」

「そうよ。ハシバのゲンもなあ。」

おとうさんも、ヒコ兄の肩かたを持つようにいいました。

これは、でたらめではありませんでした。今では信じられないことですが、そのころには、人手ひとでのたりない家では、子どもらに仕事しごとを手つだわせたり、子守こもりをさせたりして、へいきでした。